

張する。

席が離れても、玲美や沙耶とは仲がいいので、休み時間に寄ってくる。なぜか洋一と偉生も寄ってくる。洋一は、夏希をまぶしそうに見ている。釣られて振り返る。美しい！というほどの美少女ってわけじゃないんだよね、別に。けど、オーラだ。鬨っているヤツの放つ、強いオーラ。隙がない。贅肉がない。身にも心にも。それが美しく見せる。この種のオーラって、ふつうはない。美形の沙耶にも、優等生の洋一にも。順繰りに目を移すその視線が偉生に止まる。あれ？ 何だか鈍色のオーラが……。

思わず目をしばたいた。

「どうかしたの、姉さん」と沙耶。

「やっぱ偉生のこと、気になるんじゃないね？」

と玲美。消しゴムを投げつけてやった。

でも、偉生には一つだけ感謝している。苦手な数学が、前ほど苦痛ではなくなっていた。

数学が苦手なのはあたしだけじゃない。七色の声の持ち主のクラリネット少女の玲美からも、クラス一の美少女の沙耶からも嫌われているんだ、数学ってヤツは。

「だって、うちら、円周率、3で計算していいって習ったじゃん」

と沙耶。得意の「口を尖らせてもかわいいでしょ」顔。

「うそですわ、円周率は3・14です」

と玲美が朝比奈みくるの声でいった。

「けど、手で計算する時は、3使っていいって。ね！」

沙耶が相槌を求める。

「円周率は無理数だよ」

偉生が口をはさむ。

「何それ？」

「ルート2」

「無理な数」

「割り切れねえ、人生だ」

方々から勝手な声が飛ぶ。

「3・14だって概数だよ。3・141592って続くんだ」

と、偉生はあくまで真面目だが、そんな桁の先まで覚えてるって、やっぱふつうじゃない。

「円周率ってさ、コンピュータで桁を競ったりしてたよな」直也が、沙耶を見ながらいった。あたしはふと気になって、ノートの端で計算を始める。

「何してんの、姉さん」

沙耶がのぞき込んだ。

「3と3・14って、面積計算で、どれくらい違いが出るのかなあって」

「誤差、かなりありそうだね」